

# ＜私的＞地震・カミナリ・火事・コロナ

画家 小野寺 純一

令和6年と年あらたまり、身も心も清々しく、森羅万象のことごとくに感謝を捧げ、いざ発進の矢先、手元のスマホが緊急地震警報アラートを鳴らし、続いてゆっくりと強い横ゆれがあつた3・11の大災を思わせ、その時聴いていたラジオがいつものとちがって、「能登の皆さん津波がきます。すぐに高い所へそのまま逃げてください。家に戻るの危険です」とのアナウンスに、正月気分は吹っついでしまいました。日常の静かな流れのなかに、急に割り込んでくる災害、その王様が地震なんですね。心から1日も早い復興と亡くなった方々の冥福を祈らずにいられません。

さて、今回のテーマのなかでも、4番にきていた親父はどうしたと不審の方もおられるかと思いますが、昭和後半、平成、令和と続くなかで、生活様式そのものが便利、快適、清潔で、社会制度に守られるなか変容し、頑固親父の出番がなくなってしまい、物わかりのいい仲良しパパが急速に定着したのです。そして4番目の親父の座を奪ったのが新型コロナとよばれる伝染病であります。ことのおこりは、2020年春、憧れの世界一周を豪華客船でめぐるダイヤモンドプリンセス号、日本の港に立ち寄り、コロナに感染した乗客が、宇宙服のような防護装備の係官に収容されるTVニュース映像や、世界に広がるコロナ禍を知るにつれ、また予定していた諸会合やコンサート、展覧会が次々中止や延期となり、2020年4月5日の河北新報には仙台でも発生した英国風パブでのクラスタや、仙台駅前のペDESTリアンデッキの様子の写真が載り、人の数が数名、走る車皆無です。私の周りでも大事な会議はズームで、資料のやりとりはメールということになり、対面でのやりとりがほとんどなくなりました。過去の歴史でも疫病の蔓延が大きく時代を変えたことは良く知られています。14世紀のヨーロッパではペストの大流行により



(絵：小野寺 純一さん)

3000 万人以上が亡くなり、農業の人手不足が深刻化し、農奴の解放にともなう中世の封建制度が没落。16 世紀には南米インカ帝国がスペイン人がもちこんだといわれる天然痘により 3000 万人以上の死者が出、崩壊したといわれています。近いところではスペインが発生源といわれ、スペイン風邪との名前をついた疫病は世界に大流行し、4000 万人以上が亡くなりました。死者の多くは 15 歳～35 歳の若者で、第一次世界大戦の最中、アメリカが参戦し、出兵した兵隊が感染していたため、敵味方に大量に広がり、戦いどころではなくなり終結を早めたのは有名な話として伝えられています。私たちが直面したコロナ禍は、実際に医療現場でたちむかう医者や先生、看護の皆さん、バックアップした薬局、輸送担当、事務管理の皆さんのおかげで、2023 年 12 月に終息のエンドマークが出たように思います。外出から帰ったら手洗いとうがいはすっかり習慣になり、このごろは風邪もひかなくなりました。これもコロナ禍のおかげでしょう。疫病をのりこえ、大きくかわってきた世界と日本、これから先どんな世の中になるのでしょうか。スマホに代表される AI の発達は、私たちにどんな未来をみせてくれるのでしょうか。人生 100 年時代といわれる昨今、今なお続く戦争、人間たちの限りない欲望。コロナ禍は自然が私たちに問いかけた、大事なメッセージを送ったのかも知れません。